

文化審議会国語分科会日本語教育小委員会
「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループ（第4回）議事録

令和3年11月2日（火）
15時00分～17時00分
WEB会議

〔出席者〕

（委員）オーリ委員、金委員、佐藤委員、島田委員、竹田委員、平山委員、真嶋委員、松岡委員
（計8名）

（文化庁）津田地域日本語教育推進室長補佐、増田日本語教育調査官、北村日本語教育専門職、
松井日本語教育専門職、ほか関係官

〔配布資料〕

資料1 「日本語教育の参照枠」の活用のためのワーキンググループ（第3回）議事録（案）

資料2 「日本語教育の参照枠」の活用のための手引き（案）

資料3-1 「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて

資料3-2 「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールCan do 候補案

〔参考資料〕

参考資料1 「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループの進め方

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 事務局から、議事（1）について、配布資料2 「日本語教育の参照枠」の活用のための手引き（案）の説明があり、意見交換を行った。
- 3 事務局から、議事（1）について、3-1 「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて、の説明があり、意見交換を行った。
- 4 事務局から、議事（1）について、資料3-2 「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールCan do 候補案、の説明があり、意見交換を行った。
- 5 次回の「日本語教育の参照枠」活用に関するワーキンググループは、1月28日（金）15時から17時に開催することを確認した。
- 6 審議の内容は以下のとおりである。

○真嶋座長

定刻になりましたので、ただいまから第4回「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループを開会いたします。会議に際しまして注意事項を申し上げます。本日も遠隔による審議となります。円滑な進行の観点から、御発言いただく際にはお名前をおっしゃってから御発言いただくようお願いいたします。事務局側のカメラが定点設置となっており、発言者の顔が映らない場合がございます。傍聴者の皆様におかれましても御理解いただくよう、よろしくお願いたします。

それでは定足数と配布資料の確認を事務局からお願いいたします。

○松井日本語教育専門職

本日、島田先生が遅れるという御連絡を頂いておりますが、それ以外の委員の先生方は全て御参加いただいております。続きまして資料の確認です。本日、資料が6点ございます。配布資料1 「『日本語教育

の参照枠』活用のためのワーキンググループ（第3回）議事録（案）」です。配布資料2「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き（案）」です。配布資料3-1「『日本語教育の参照枠』の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて」です。配布資料3-2「『日本語教育の参照枠』の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールC a n d o候補案」になります。最後、参考資料1「『日本語教育の参照枠』の活用に関するワーキンググループの進め方」です。以上が本日の資料になります。

○真嶋座長

次は議事録の確認となります。配布資料1の前の議事録案については御確認を頂き、修正の必要がある箇所がありましたら、本日より1週間をめどに事務局まで修正点をお知らせください。なお、最終的な議事録の確定につきましては座長一任とさせていただきますと思います。

これより審議に入ります。議事1、「日本語教育の参照枠」の活用に向けてです。こちらでは配布資料2「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き（案）」の検討を行います。この「手引き」の第2章につきましては、執筆に御協力くださいました委員の皆様、お忙しい中、本当にありがとうございました。配布資料2の審議につきましては、各章、各節ごとに執筆を御担当いただいた委員の方より御説明を頂き、その後に検討を行っていききたいと思います。

まず、事務局より配布資料2「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き（案）」第1章と参考資料についての説明をお願いいたします。

○松井日本語教育専門職

事務局より配布資料2、「手引き」の第1章と参考資料の部分について説明します。2章の各節に関しては委員の皆様が執筆を御担当いただきありがとうございました。2章に関しましては、頂いた原稿について体裁を整えそのまま掲載させていただいております。

まず、「はじめに」については事務局で準備しましたので、御意見等あればお願いしたいと思います。続いて目次の部分です。目次に関しては、参考資料がまだ整っておりませんが、このようなものを載せたらどうかということについて案を示しておりますので、こういうものを載せた方がいいという御意見がありましたら御指摘をお願いできたらと思います。

続きまして第1章に関しましては、前回のワーキングで提示いたしました一問一答式の12の質問に説明を加えて、キーワード、そして「もっと知りたい人に」ということで「日本語教育の参照枠」本冊のどこに説明があるのかということを示しております。

コラムに関しまして、1は真嶋先生に御執筆を頂きました。コラム2に関しましては事務局で作成しております。コラム3に関しては日本語教育小委員会の根岸先生に執筆いただいております。こちらの内容についても御意見を頂けたらと思います。さらに今回コラムをもう一つ、日本語教育以外の外国語教育においてC a n d oがどのように活用されているかということを紹介するコラムを載せられたらと思っておりましたが、適切な例が見つからず、コラムが準備できていない状況です。例えば、韓国語教育などでC a n d oベースの例などがあつたら御紹介いただけたらと思っております。また、韓国語教育以外でも、中国語教育やその他の言語教育においてC a n d oを基にした教育事例等々を委員の先生方が御存じでしたら、御指摘を頂ければと思っております。

以上が第1章と参考資料についての説明です。この部分についての説明は以上になります。

○真嶋座長

それでは第1章の部分と「はじめに」について、御意見を頂ければと思います。いかがでしょうか。

私が書かせていただきましたコラム1のところですが、副題の方は削除してはどうかと考えておりますので、もし差し支えなければコラム1の副題はなしにさせていただけたらと思います。

また、事務局で1章について御尽力いただいて、随分いいものを書いていただいたと思いますが、A1などの幾つかのC a n d oの引用がありましたが、それを「日本語教育の参照枠」に戻って見ようとすると、分かりにくかったので、どのC a n d oを引用しているのか、番号を付けてもらった方がいいと思います。C a n d oのリストを1番から順番に読んでいくのも大変ですので。

○松岡委員

5 ページ、Q 3 のところですが、「『日本語教育の参照枠』とは、言語・文化の相互理解・相互尊重を前提として」というこの文言は、理念としては分かるのですが、唐突な感じがします。少し読みにくいという印象を持ちました。

それから、①の社会で「共生社会の実現」が入っています。少し唐突な感じがします。③の教育機関・教師で「分野に応じた」というのが、分野だけではなく、レベルもだと思います。⑤の学習者で「自律学習の推進」が先に来ていますが、これも少し分かりにくいのではないのでしょうか。

私たちはずっと関わっているので、当然のことで大事だというのはよく分かりますが、背景を何も御存じない方々が読むと少し唐突感があるのではないかというのが印象を受けました。以上です。

○真嶋座長

確かに少し読みにくい感じがします。③の「分野に応じた」というところ、私も引っかかっていた。それから「自律学習」という部分も、もう少し工夫していただけたらと思います。自律学習という言葉は Q 1、1 番目の質問の「なぜ『日本語教育の参照枠』が作られたのですか？」の最初のキーワードとしても出てきますが、自律学習という言葉は本文中にはないので、ここは工夫をしていただくか本文の方に括弧して自律学習と入れておいていただけるとよいのではないかと思います。

○佐藤委員

第 1 章の全般についてですが、まず質問、「なぜ『日本語教育の参照枠』が作られたのですか？」があって、その後、少し文章が長いのではないかという印象を受けています。この下にキーワードがあるので、それを一番前に持ってくるか、もう少し短文で先に説明をしておいて、そこからもう少し詳しくしていくといった形でもいいのではないかなと思いました。

○真嶋座長

質問は 1 行で答えが 10 行あるので、少しハードルが高い感じでしょうか。一言二言先に出してもらおうと思います。

ほかにはいかがでしょうか。前回の会議でも議論になったかと思いますが、1 章から 2 章へのつながりが分かりにくいという点と、それから CDC、Competences for Democratic Culture という、コラム 2 が唐突なのではないかという指摘がありました。今回の提示の方法を御覧になっていかがでしょうか。前より何かスムーズな感じで、ああ、こういうことも知っておくといいなという感じに受け取れますでしょうか。

○オーリ委員

今回、全体を読んでみて非常に分かりやすいかなと思っています。先生がおっしゃったように、スムーズな感じがします。これを読んでから自分はどのようにシラバスを組むのか、あるいはコースをデザインするのかということを考えている人、例えば私だったらイメージが湧きやすいかなと思いました。

○真嶋座長

ありがとうございます。その作成趣旨がちゃんと実現しているということでしょうか。コラム 3 で、先ほどの事務局からの説明にもありましたが、英語教育の C E F R - J の取組について根岸先生がお書きくださった部分ですが、ここはいかがでしょうか。根岸先生にもう少し加筆修正していただくようなリクエストや、あるいは何かお気づきになった点はありますか。

C E F R を日本語教育に使いましょうというだけだと、ほかの言語はどうなっているのというような疑問の湧く方もいらっしゃるでしょうから、先行事例として日本でも英語教育では既にこんなふうに使っていますよということを示したコラムだということで、少し読者というか使用者にはクッションがあつていいかなと思いましたが、どうでしょうか。

先ほど事務局からも説明がありましたが、このコラムは三つで終わらないでもう一つ、ほかの、例えば

中国語の参照枠とか韓国語の参照枠のような先行事例があれば、そういうものも紹介してもいいのではないかというお話でしたが、これはいかがでしょうか。金先生、何かコメントがありますか。

○金委員

韓国語能力試験のTOPIKの試験の改訂をされた時期に、CEFRを参照してレベルの整理をし、語彙等の整理をした経緯が、論文としても発表されているかと思えます。コラムにほかの言語での活用例ということでもし追加するのであれば、それがコラム4になるというイメージでよろしいでしょうか。

○真嶋座長

そういうイメージでお尋ねしていると思えます。それを作ってやっていますというような紹介か、作ったことで韓国語教育がスムーズにいつています、成果が出ているとか、そこまでは言えないでしょうか。

○金委員

少し言いにくいですが、調べる必要があるのですが、試験を整理する段階ではこのように参照したという記録は多分あり、探せば参照できるものがあると記憶しています。その後、現場にどのように活用されているかというような形だと、探す必要があります。

○真嶋座長

ありがとうございます。少しお調べいただいて、「日本語教育の参照枠」の普及に役立ちそうであれば紹介していただくという形であればと思います。

○金委員

承知いたしました。

○松井日本語教育専門職

御存じの委員の先生方がいらっしゃったら御教示いただきたいのですが、例えばドイツの統合コースなどもCandoが使われているでしょうし、同じような、韓国国内での生活者として外国人に対する韓国語コースも地域で非常に広範に行われている中で、Candoを利用した取組などでよい例を御教示いただければ、それをコラムで取り込めたらと思っております。よろしく願いいたします。

○真嶋座長

それでは、情報がありましたら事務局に御連絡いただければと思います。あと、少し気になったのが、根岸先生が書いてくださったコラム3ですが、文章の途中に「Candoにもともとあった『手紙や葉書を理解する』という行為は、日本の中高生にはなじみが薄く、困難度が高くなってしまったことから、『手紙や葉書』は『携帯メール』に修正しました」という説明があります。

「日本語教育の参照枠」のCandoは、はがきのままです。「読むこと」で「友達からのはがきの簡単な内容が理解できる」というようなものがありますが、それはCEFRの2001年版が出来たとき、つまり1990年代に作られたものです。その時にはA1のレベルとして、友達が休暇にどこか楽しいところに行って、ヨーロッパ言語だと話し言葉と書き言葉の乖離がさほど大きくなく、「こんにちは。ここに来ています。楽しいです。海がきれいです。」というような絵はがきをもらってそれが読めるのがA1レベルというイメージがあったかと思えます。

その「簡単なはがきが読める」というのをA1の日本語でやって大丈夫なのか。もし同じようなシチュエーションを考えると、絵はがきを書かないでSNSだったり写真を撮ってアップしたり、そういうことの方が一般的で、絵はがきを読むことを到達目標にするような日本語教室ってあるのかなというのが少し疑問です。ただ、この会議は「日本語教育の参照枠」のCandoを吟味する場ではないので、それはCEFR-CVを検討する際に中身を改訂していけばいいのかと思っています。

それでは続いて、第2章の各部分を御執筆いただいた委員の皆様から、執筆内容について御説明いただ

ければと思います。順番は執筆順に、金委員、佐藤委員、竹田委員、平山委員の順番でお願いしたいと思います。まず、金委員の第2章の1についての御説明をよろしくお願いいたします。

○金委員

では、どのように書こうと考えたかということ、書いていて迷ったり疑問に思ったりした点も含めて、最後はアドバイスいただけたらと思う点を述べさせていただきたいと思います。

まず1の、カリキュラムの事例に入る前の一節です。これは教育機関のプログラムへの「参照枠」の取り入れ方を中心として述べました。大きな柱としては(1)でどのようにコースをデザインしたらいいかという点については、一般的にカリキュラムデザインに際して考えていったらいい項目を挙げております。その前提として、理念をもう一度思い出していただく意味で、何のためにこれをやるのかということに触れました。その後は、コースデザインの一般的な考え方を簡単に述べております。

次に、C a n d oをベースにしたカリキュラムデザインについて、バックワード・デザイン、逆向きの設計の考え方を借りて、実際に落とし込むとしたらどういう順番で考えていくといいかということについて述べております。それから、既存のシラバスへ組み込んで再検討したい場合もあることを想定しまして、そこにつながるような形で一節を立てております。

2番目の柱としては評価の部分があり、これは1章のQ11と関連があります。基本的には1章で挙げられた評価の種類、テスト、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価の範疇に入るようなものをそれぞれ挙げて、簡単に説明をしました。この節は、まだ草稿で直すべきところもあろうかと思いますが、出来るだけ「参照枠」の理念を想起してもらって、C a n d oに触れながら、それぞれの段階でやることを説明し、間接的に「参照枠」の構造や内容の理解につなげていけたらということを狙いました。

書いていて気になったことでアドバイスを是非頂きたいと思う点を幾つか挙げさせてください。1点目は、幾つかC a n d oの例示をしていますが、実際にCEFRのC a n d oの種類の中には活動C a n d o、方略、テキスト、能力というように、目的によって種類が分けられているかと思います。事例としてはテキスト、いわゆる直接言うというよりは、メモを取って理解を促したり、仲介をしたり、処理をするようなC a n d oが入っていますが、出している例があまりそれを媒介しなくてもよさような事例を出しているのかなと思ひまして、事例をもう少し検討した方がいいかもしれないと思った次第です。

それに関連してですが、主にカリキュラムを作る側にもイメージしていただけるように、母語話者とのやり取りというカテゴリーを例に挙げています。その中で、生活場面がイメージできるような例を挙げていますが、これが例示としていいのかどうかということも気になりました。

というのは、J F C a n d oの例を挙げているのですが、実際に「参照枠」では生活・留学・就労のC a n d oが参照できるという理解で正しいでしょうか、そこから引いた方がいいのかなと、後から改めて思いました。ですので、C a n d oの取り上げ方、事例の取り上げ方で、こういう挙げ方が分かりやすいのではないかということがあれば、是非アドバイスいただきたいというのが1点目です。

二つ目は、評価に関する理念についてのことで、1章で書かれている三つの理念があります。私がこの素案を執筆したところでは、カリキュラムのデザインということで、教育的目的に絞ってこの評価を挙げているのですが、理念の方には社会的な意義といいますか、学習を継続していけるようにというようなところが触れられています。

実はカリキュラムの中ではそこまで取り上げるのは難しいなと感じました。この節は、学んだことをしっかり評価できるかというところに終始しています。次の学習の段階に行ったら、どのように生かされるかとか生かせるかとか、職場の人たちと話すときとか、というような、教室を出たときにその評価がどのように扱われる可能性があるかについては、どのように執筆すればいいのかなということが気になった次第です。大きい質問はこの2点です。ほかに細かいこともあります。まずはこの2点とさせていただきます。以上です。よろしくお願いいたします。

○真嶋座長

ありがとうございます。短時間で分かりやすい内容を書いていただいたと思います。皆さんの方でお気づきの点、アドバイスがありますでしょうか。

○金委員

少し事実確認だけさせていただけないでしょうか。生活・留学・就労に関するC a n d oがこの「参照枠」のオリジナルの部分になるのかというイメージでいるのですが、そこから例を取り上げるというような考えは合っているのでしょうか。

○真嶋座長

今までの日本語教育の歴史的経緯といいますか、現段階までの日本語教育のフィールドの研究などを見ると、ここにいる私たちも多くは留学生の日本語教育に携わる人間が多くて、これからますます増える就労や生活の人たちにどのような日本語教育が必要なのかということのエキスパートばかりではないわけです。今回文化庁から「日本語教育の参照枠」の手引きが出たのは、留学生だけでなく、生活・就労の目的でいらっしゃっている方の日本語教育でこんなことが出来る、これを参照してくださいというような趣旨があるはずなので、例示も大きく就労・生活に特に力を入れたものがないのではないかと私は個人的には理解しています。

日本語教育の専門家として仕事をしている世の中の多くの日本語教師は、留学生を相手にやっている人が多いと思います。しかし、留学生と同じように、生活者や就労者に対する日本語教育ができるわけではありません。人間としては同じですが、やはり環境が違いますし、目標も目的も違います。また、費やせる資源も違うので、そこでより学習者の目的に合ったものを、環境を見定めつつ、しかも日本語教育のプロでない人でも教えられるように、あるいは支援が出来るようには日本人の方の受け入れ側の姿勢といいますか、そういうものも含んだものを提示することで、遠くには共生社会をうまくやっていくというようなことがあると思います。

金委員の御質問にうまく答えられているかどうか分からないですが、第2章でもカリキュラムの事例として、教育機関のプログラムへの取り入れ方ですが、実際は教育機関というはっきりしたものではなくて、一人で教えるようなケースもあると思います。その時に参照していただく「日本語教育の参照枠」を使うときの「手引き」ですから、なるべく教育機関ではない人が読者という考えでもいいのかもしいかなと思いますが、いかがでしょうか。

○金委員

なるほど。最初は教育機関で教える方でも、一人でコースを運営する方でも読み込めるような書き方で始めていたのですが、だんだんマニアックな話になっていって大丈夫かなと心配になっていました。ですので、書き方を平易にすることとは又別に、どういう方に参照していただきたいかということをもう一度想起したいと思います。

○真嶋座長

ありがとうございます。J FスタンダードとかJ F C a n d oを使ってどのように日本語教育機関でカリキュラム作成に取り組むかというようなことは、物の本を見れば様々載っているところもあるので、それではあまり自分が教えようとしている目の前の学習者にぴたっとこないとか、日本語能力試験はまあいいから、取りあえず生活や就労に必要な日本語を教えたいと思うような先生あるいは先生になりたい人に分かるような書きぶりがいいのではないかと思います。

少し気になったのは、ニーズ調査、レディネス調査、シラバスがこうで、カリキュラムデザインがこうでというのは、日本語教育学概論みたいな感じで非常に基本的な知識ではあるのですが、これはどこまで書き込んでいったらよいのでしょうか。バックワード・デザインについても、ある学習者に教える場合に半年、何か月かけてこれができるようにするというのを考えて、何をどうしたらいいかということを考えてみてはどうですかというようなことについて、日本語教育のプロでない方に理解してもらえるためにはどのような書き方をすべきなのでしょう。金委員に過重な負担をおかけするのもよくないと思いますが。

○金委員

今御指摘いただいて、コースデザインの概論的なところを入れるべきか悩んでいましたが、方向性が確認できれば、基礎的な説明の部分を軽くすることは問題ないと思っております。

○真嶋座長

さらに詳しく知りたい人のために参考文献を挙げたり、国際交流基金の教授法シリーズなどにも言及したりしていただければと思います。

○金委員

では、概説のところは軽くしておいて、参照できる資料がたくさんあるので、それらに触れることにします。

○真嶋座長

何か違う御意見がありましたら、委員の先生方、御指摘をお願いしたいと思いますが、24ページの最後、ポートフォリオ評価の前のところに、ループリックについての言及がありますが、ループリックについては初めて聞く人のためにはシンプルな図が付いていると親切ではないかと思いました。

○金委員

ループリックについては、ここでどのくらい詳しく触れるべきか悩んでいましたが、入れた方がいいという御意見で了解しました。

○真嶋座長

言語知識がテストで100点分の何点あるかという評価ではなく、このような項目で見たらよく出来る、あるいはもう少し頑張れといった段階について数値化をしなくてもいい、そういう姿勢で学んでいる学習者にはぴったりなのではないかと思うので、ぜひお願いしたいと思います。

○金委員

ループリックの例を入れる場合は、3つの事例で挙げる内容を示すとつながりやすいかもしれません。

○真嶋座長

その方が親切かと思います。あと、二つ目の御質問の、教室を出たときどうしていくかということについては、教室の中だけでしか教師は責任を持ってないので、その後は自律的な学習者として、あるいは生涯学習の学習者として自分で様々考えたり、アドバイスを得ながら学習を進めていったりしてほしいというスタンスが書けるとよいと思います。その人の日本語の学習を一生責任持って見るわけではないということが一目で分かるような簡単な絵があるといいのかなと思います。

○金委員

まとめのような役割ということでしょうか。

○真嶋座長

そうですね。もちろん、何年間だけ勉強する、N3取ったら終わりというような人がいてもいいのですが、みんながみんなそうではなくて、細々とでもずっと勉強を続けるかもしれません。ですので、生涯学習的な視点も入れておいてもいいかなと思いました。

○島田委員

二つ質問とコメントがあります。一つ目の質問は、19ページに挙げられているCandoの「学習目標を設定する」のところの、例えば「A2レベルの『母語話者とのやりとり』に関するCandoの中

には」としてC a n d oが出ています。「日本語教育の参照枠」では「母語話者とのやりとり」というカテゴリーは使っていなかったと思いますが、いかがでしょうか。

CEFR-CVでは、「母語話者」という言葉を取っていますし、今回の原稿の中で挙げてくださっているC a n d oは「日本語教育の参照枠」で出されるものとは微妙に異なっているかもしれません。

もう一つは、今日の段階で事例の原稿とこの2章の原稿が皆さんに公開されて、これからの調整になると思います。金委員の書かれているところの事例の、例えば評価シートなどは3つの事例の中の何ページを御覧くださいなどと、手引きの中で行ったり来たりできるようになるといいのかなと思いました。

○真嶋座長

ありがとうございます。この「手引き」の中で有機的に結び付けておくということですね。

○島田委員

そうですね。もちろん「手引き」以外の参考文献などとの結び付けも重要だと思いますが。

○金委員

貴重なコメントを頂きありがとうございます。事例につなげるような形というのはそのようにしたいと思います。やっと全体像が見えたので、これからその方向で修正させていただきます。それから、もう一度「日本語教育の参照枠」の中で参照するものの確認をして修正してまいりたいと思います。

○真嶋座長

ありがとうございます。よろしくお願ひします。それでは次に佐藤委員から原稿についての説明をお願ひしてもよろしいでしょうか。

○佐藤委員

前回の会議で指摘された修正箇所、方向性に沿って書き直しを行い、3点追加しました。32ページの表4、言語能力記述文の作成や学習言語項目の検討をする際に用いた枠組みを追加いたしました。

加えて、実際のC a n d oチェック、セルフチェック、自己評価シートを図1、図2、34ページ、35ページに追加しております。さらに、38ページの図3を追加しております。こちらは実際に教科書の中で扱ったC a n d oと、社会的課題、実際の言語行動との狙いも含めて、関連したものを理解していただければと思い、追加いたしました。以上です。先ほどの金委員と同じで、書く上で難しかったところやアドバイスいただきたいところを今からお話しします。

まず、先ほどからお話になっているバックワード・デザインや専門的な用語の扱いについて、金委員の節で詳しく扱ってもらい、そこから事例の方でそのままその用語を使ってやった方がいいのか、それとも事例の方でももう少し詳しく、「バックワード・デザイン、すなわち」といった具体的な説明を加えていった方がいいのか。このような用語について全体で確認・調整ができればと思います。

加えて、「言語能力記述文(C a n d o)」という書き方と、単純に「C a n d o」という書き方と様々と交ざっているところもありますので、そういったところも調整が出来ればと思っています。

そしてもう一点が、個人的な感想になるかもしれませんが、実際の事例集の最後が⑥課題で終わって、まとめ部分がなかったので、書いている側としては最後、何かもう少しまとめ部分というか、もう一回要点をまとめる部分があれば、より中身が詳しく伝えやすいかと思っています。

これに関連して、竹田委員、平山委員の事例を拝見しまして、この事例でこういったところをお伝えしたいですといったことも含めて書いていらっしゃる部分もあるので、そのような対応も可能かとは思いますが、まとめ部分を作るかどうかということについて相談できればと思っています。以上です。

○真嶋座長

ありがとうございます。いかがでしょうか。専門用語をどの時点でどのように出すかということで、バックワード・デザインの例で御指摘がありました。この「手引き」は、読まれる方が1ページ目から順番

に全部を読むとは限らないと思います。「私、これ、関係ない」と思って読み飛ばしたり、「私は島根のこれだけが見たい」というように思われたりするかもしれないので、そういうことを考えますと、そこである用語が出てきたら、それを簡単にもう一回説明するなり、初出のページを書いておくなり、詳しくは2章のここにありますがということが書いてあると親切かと思います。ページ数の制限もあるかとは思いますが、「これはさっきも読んだ」と思われる人への弊害よりは、書いていなくてこれが何か分からないというままで進んでしまう方がよくないのではと思います。初出のところで説明があれば、後の人はそこに言及するなり、簡単にもう一回言うというのがよいかと思います。

それから表記の不統一、C a n d oというのか、言語能力記述文(C a n d o)というのか。このC a n d oを、私たちは「キャン・ドゥー」と言っていますが、初めて見た人はC a n d oって読めるでしょうか。片仮名で「キャン・ドゥー」と書いてあるのは一回もなかったと思います。CEFR(セファール)もそうですが「シー・イー・エフ・アール」と呼んでもらうのか。片仮名表記も最初に1回ぐらいあってもいいのかなと思いました。

それから6番のまとめを加えるか、事例の中に盛り込むかですが、いかがでしょうか。両方あってもいいかもしれません。書かれた方のメッセージ性は出し過ぎて困ることはないのではないかと思います。取扱説明書のような書き方ではなく、書いた方の心が伝わるかといいますか、そういうものになるかというのではないと思うのですが、どうでしょうか。佐藤委員は特に書きたいというお考えでしょうか。

○佐藤委員

ページ数のことを考えると、中に入れ込んだ方がいいのかと思いながらも、最後の部分が課題で終わっているのも、まとまりはあるのですが、実際の事例と「日本語教育の参照枠」との関わりですとか、そういったところについて最後につなげていくところがあると、より理解しやすいのかなと思いました。私個人は加える分には全く問題はありません。

○真嶋座長

事務局にお伺いしますが、ページ制限はありますか。

○松井日本語教育専門職

当初は事例ごとに10枚程度を想定しておりました。事例ですので20ページ、30ページになってしまえば、ボリュームがあり過ぎるかなというところで、10枚をめどとしました。実際原稿はサンプル等々を挙げていただく過程で、12ページ、13ページとなっておりますので、佐藤委員が御指摘のとおり、まとめがあると、よりメッセージがきちんと伝わるかと思います。今回頂いたボリュームに関しては、まとめも含めまして15ページ前後で整えていただければと思っております。

○真嶋座長

では、そのような方向性をお願いします。他に何かありますか。又後でも、お気付きの点がありましたらメールでお寄せいただければと思います。では、次に竹田委員、お願いします。

○竹田委員

留学の事例の原稿について説明させていただきます。原稿執筆する際に迷った点は、留学の2年間、1,568時間に及ぶ課程の全体像をどのようにお見せすればよいのかという点です。全体のどの部分をどのように切り取ってお見せすれば分かりやすいのか、また、切り取った要素同士の関連をどのように見せていくかを悩みつ、作業を進めました。

例えば、本日資料の「手引き」の45ページに表3を載せていますが、表3は2年間のカリキュラムの一部抜粋を載せています。この表3でレベルごとの到達目標(C a n d o)を出しているのですが、プレA1からB2ないし一部C1にかかる広い範囲のカリキュラムで、C a n d oも一部を切り取ってお見せする形になっていきますので、これで全体像をイメージしていただけるのだろうかということ悩みつ、載せました。

この原稿を御覧いただき、このようなことで御期待に沿っているのでしょうかということや、委員の先生方からここは少し分かりにくいから補足せよなど、あるいはもう少し見せ方を変えなさいということがございましたら、御教示いただければと存じます。

なお、先ほど佐藤委員からも専門用語の出し方のお話でしたが、それと同じような点の質問があります。CDCを留学の事例の54ページで「民主的な文化への能力（CDC）」という形で挙げているのですが、「手引き」の第2章の10ページでは「民主的な文化への能力モデル（Council of Europe）」と短く引用が出ていて、「2018a, p. 38」が出ているのですが、どういう載せ方がこの場合妥当なのかをお伺いしたいと思っております。CDCと書いてしまっているのか、正式の英語名で書くのか、日本語訳を使っているのか、御教示いただけたらと思います。よろしく願いいたします。

○真嶋座長

竹田委員の執筆部分は、図や絵が分かりやすく配置されていて、大変御尽力を頂いていると思います。CDCをどのように出すかということですが、コラム2、10ページの段階でこの具体例は何ページと示してお互いに指示し合うというようなことにすれば、有機的に関連付けられていてよいと思います。CDCは日本語でも英語でも両方で書いてもらった方が誤解がないと思います。よく使われる用語ではもちろんありませんから、うるさいぐらいでも構わないのではないのでしょうか。

○竹田委員

ありがとうございます。あと、一つだけ確認です。先ほどの10ページのコラムについては、その出典は後々巻末に載ると考えたらよろしいでしょうか。どこかに1か所引いていただければよいということになるのかと思うのですが。

○松井日本語教育専門職

これに関しては、現状、留学の事例では参考文献としてまとめてくださっていますが、三つの事例を含めて全てまとめて巻末の参照資料のところに載せてはどうかと思っています。ただ、読みやすさを考えて、参照する文献は金委員が執筆してくださったところも引用が多数ありますので、節ごとに示した方が親切であるという御意見があれば、そのようなまとめ方もあるかと思っています。全ての章でまとめて後ろの方に出示すと、分かりやすいようで実は少し分かりにくいところもあるのかと思います。

巻末の参考資料に関しましては、事例で挙げた文献のリストのほかに、読書案内のようなものも載せられたらどうかと思っています。これについても御意見を頂きたいと思っています。

○真嶋座長

ありがとうございます。この10ページのコラム2でCDCを紹介したところの最後に、具体例はコミュニケーション学院の事例がありますよと書いておいてもらったらいいかと思いました。

○松井日本語教育専門職

節ごとのつながりは今日御審議していただきたい主な内容ですので、この部分がこことつなげられる、というものを示していただければと思います。今日でなくても後ほどでも構いませんので、挙げていただければと思います。また、ここの部分はもう少し詳しく書けるのではないかという御意見もあれば、CDCに関する能力、資質はもちろん、前半の理念についても、是非御意見を頂けたらと思っています。

○真嶋座長

竹田委員から出ていました表3のレベルごとの到達目標と科目の概要の表は、伝えたいことが伝わっているかという点について、御意見あるいはアドバイスなどありましたらお願いします。

○竹田委員

表3だけでなく、ほかのページについても御指摘があればお願いいたします。

○真嶋座長

膨大なリソースから抽出してくださっているの、初めて見る人はすごいと思うだけできちんと理解できるかどうかということですが、いかがでしょうか。ページ的には、量的にはまだ増やせますか。

○松井日本語教育専門職

全体のバランスで各事例15ページをめどということをお考えますと、留学の事例はこれで15ページぐらいだと思いますので、ボリューム感はこれぐらいでお願いできればと思います。あと、参考文献をもし後ろにまとめるのであれば半ページほど空きますので、そこで開発の経緯の思いを受ける形でのまとめなども、示していただけるといいのかなと思います。

○竹田委員

留学の事例に関して言いますと、本校の事例に直接関わる参考文献はこの近くに配置されていた方が分かりやすいかなと思います。もう一つ、先ほどのまとめは必須ではないが入れてもいいというような形でしょうか。もし入れるとすれば、この留学の事例でしたら、ポートフォリオの例が終わった後に最後にまとめが入るといったイメージでしょうか。それとも、課題の後に差し込むというイメージでしょうか。

○松井日本語教育専門職

生活の事例は恐らく課題の後に想定されていたと思いますが、各事例で適切どころに入れていただければと思っています。

○竹田委員

もう一つ委員の先生方には是非お伺いしたいのは、これで本当に分かりますかということです。分かりにくいところがあったら是非御指摘いただきたいと思います。

○島田委員

豊富な実物を共有して下さって分かりやすいと思います。一点、全体を通して見たときに、教員側といますか、運営側が使う資料と、学習者が使う資料がもう少し明示的に分かれているといいのかなという気がしました。大事なものは、教師側、運営側が作るべき共有資料と、学生に見せるシラバスは恐らく違うと思います。初めてコースデザインをしたり、Candoを使おうとしたりといったときに、誰がそれを使うのか、誰が見るのか、そういうところが整理されると分かりやすいのかなと思います。

この事例だけではなく、運営に関わる資料と学習者が使うものみたいな形で整理ができているとよいと思います。誰がどのタイミングでその資料を使うのかがあるといいのかなと思いました。

○竹田委員

島田委員の御指摘は、例えば各資料にマークを付けて、これは運営側が使うもの、これは学習者が使うものだということを表示するようなことでよろしいでしょうか。例えば左右に分けて、左側には運営用のもの、右側には学生用のものというように配置し直す、あるいは一々二つずつ見せるなど、様々なやり方があるかと思うのですが、どのようなイメージかを教えていただけたらと思います。

○島田委員

コース開始前の企画段階と、実際にコースを始めて実施している段階と、終わった後の評価段階というように考えると、企画、計画段階では教員が必要なシラバスなどを作ると思うのですが、コースを運営する段階では先生のものや学習者のものがあると思います。また、コースが終了段階で評価するときには、学習者の成績、パフォーマンスを評価するツール、ポートフォリオや自己評価チェックなど様々あると思います。学習者の評価もタイミングごとに様々あります。なので、時系列に、誰がどのタイミングで作ったりつかったりするのかということが整理されるといいのかなと思いました。

○竹田委員

時系列ということについては、工夫いたします。本校のカリキュラムは、年間イヤーブックという形であり、それに沿って実施していくわけですが、その分かりやすい示し方を考えてみたいと思います。

○真嶋座長

島田委員のおっしゃることに大賛成です。見ていたときに、自己評価のところでチェック、何々をチェックというのがあり、これは誰がチェックするのかと時々分からなくなることがありました。

基本的にこの「手引き」を御覧になるのは学習者ではなくて先生だろうと思うので、先生を主語にして書いておいて、学習者にも自律的に学んでもらうというところは分かるように特筆しておくような形が分かりやすいかと思います。それと、一般の方、あまり日本語教育をやったことのない方が御覧になったときに、誰が主語かは書いていただくと分かりやすいのではないかと思います。

○竹田委員

本校の場合、例えば50ページの図1の学習サンプルにあるチェックの主語は全部学習者です。しかし、読む方から見れば、これは教師というように御覧になる方もあるだろうというのを伺いましたので、もう少し分かりやすい示し方を工夫したいと思います。御指摘ありがとうございます。

○真嶋座長

竹田先生のセクションはほかによろしいでしょうか。では、平山委員、お願いします。

○平山委員

では、就労の事例について、どんなところを迷いながら書いたかというところからお話を簡単にしたいと思います。我々のカリキュラムは、CEFRを基にという絡みがない状態で、そこをどう絡めていくかということで、事務局から事前に頂いていた「手引き」の骨子も見ながら、そこの関連を考えつつ、特に就労の場合、どういう文脈でどういう関係者がいてというところを整理しながら書きました。

迷った点は「手引き」の1章、QA形式で書かれていた部分との関連が示しているかということです。特にポートフォリオ評価については、現状のカリキュラムの中で何かをファイル化して整備していくところはなかったので、考え方として関連しているところを整理して書きました。それが「手引き」の事例としてどうかということについて、委員の方々からコメントを頂きたいと思います。

そのほか、留学と生活の事例も一緒に見ながら見返してみたのですが、文脈を丁寧に書いていったことで文章が続くということがほかの事例と少し違うと思っていますので、その辺の見せ方の点など、もう少し工夫できる点があればコメントを頂けたらと思っています。あとは、CDCと関連する部分ですが、そこをどのように引用するかということも考えておりました。

もう一点、金委員が書いてくださったところで、シラバスが出来上がってからカリキュラムデザインを作りますといったところ、コースデザインの概説で16、17、18ページ、そして、バックワード・デザインという流れのところ、就労という分野で考えたときに、教育なり就労支援を依頼してくるのは就労者本人ではなく、企業側であり、実際の支援ニーズが就労者よりも前に現場から声が上がって、そこから調査をしつつ、そこで就労者にたどり着いていくという順番があります。このように就労分野ですと、始め部分の関係者とのやり取りがほかの分野と違ってくると思います。そのような部分も含めてコメントを頂けたらと思います。よろしく願いいたします。

○真嶋座長

確かに、就労はほかの分野と違います。就労の全部が全部同じではないと思いますが、企業の方が日本語教育を依頼してくるということであれば、その企業が求めるものを具現化しないと話が進まないの、いきなり就労者、学習者個人に接するわけではないということかと思っています。そのような分野の特性は書いてくださいましたでしょうか。

○平山委員

はい、「対象、目的、特色」、「運用した結果、効果」、「課題」のところで触れています。

○真嶋座長

ほかの委員からもコメントなども頂きたいと思いますが、どうでしょうか。少し見せ方の工夫をしていただいた方がいいでしょうか。もう少し図などがあった方が読みやすいでしょうか。御意見、コメントありますでしょうか。

○金委員

最初の概説はあまり分野を選ばないといえますか、どこも特別に引っかけられない書き方が出来たらいいなということで書きつつ、17ページの「現場の目標言語について知る」については、企画とか調査の段階で就労の場合は関係者へのアプローチや情報収集の段階が入るだろうということを意識して書きました。バックワード・デザインの書きぶりとしましては、それがないといけないということではなく、一つの考え方として、現実にある具体的な目標を中心にデザインするときの一つの考え方として使えますよというスタンスのつもりでおります。ですので、必ずしも何をやらなければいけないかが先にないといけないという意味ではないのですが、C a n d oがある程度示されることによって、それがやりやすくなるというイメージでおりました。ですので、平山委員の就労の事例の書き方と反するような書き方になっていなければいいのですが、大丈夫でしょうか。

○松岡委員

就労のところは、日本語教育になじみがない方も見る可能性が高いので、要点を箇条書きや表にして出していた方がいいのかと感じました。

あと、職場の方が関わる場合に、学習者が「日本語教育の参照枠」に合わせて学んでいくときに、学習者が頑張ればいいのだというように見てしまいがちです。しかし、特にA1やA2のC a n d oを見ると日本語話者の配慮がかなり入っています。そのことを少し強調する書きぶりにした方が、C E F Rの理念にもかなっているのかと思います。これは全体にも関わることだと思いますが、就労や生活は特に日本語話者側の配慮の部分を示していただけるといいのかと思います。

○真嶋座長

重要な指摘です。これをしっかり読まなくてはとご配慮くださる方々は、日本語教育の専門性をこれからつけていこうという方が多いかもしれないので、分かりやすく、工夫していただくとよいと思います。

加えて、例えば61ページの上に囲みで示している課題があります。ここに書いてある行動目標としてのC a n d oと言ったときに、「仕事の簡単な指示がわかって、適切に行動できる」というのは一般論としてはそうなのですが、もう少し具体的に例えば何々の工場ではこうだ、農作業ではこうだ、など幾つか具体的な発話例みたいなものまで落とし込んでもらってもいいのかと思いました。「簡単な指示」という言葉で想像することが読者によってばらばらになる可能性もあり心配なので、具体例を出していただいた方がいいかと思いました。

あと、先ほど松岡委員もおっしゃったような箇条書きにして長い文章を少なくしたり、図示できるものはしたりしてはどうでしょうか。それから受入れ側の方の歩み寄りの重要性、配慮の重要性についてもアピールしてもらえるとよいと思います。就労といっても、特定技能の方から高度人材のビジネスマンから、本当に広いわけですから、全部を15ページに収めようと思わなくていいと思うので、ここでは具体的な例を紹介してはどうでしょうか。大変な作業ですがお願いできればと思います

○平山委員

最後に書いたポートフォリオのサンプルにキャリアプランニングの取組を載せていますが、このキャリアプランニングは、記録することを目的に実施しているわけではなく、一人一人が自分のことを振り返る

ことも目的とした活動なのですが、ポートフォリオ評価とどのくらい関わりを持たせられるのか疑問をもっています。もしかしたら、別のキャリアプランニングの箇所に差し替えようかということも考えています。このポートフォリオ評価の部分についてコメントがあれば、お願いいたします。

○真嶋座長

ポートフォリオで評価になじみがない方も「手引き」の利用者の方には多いと思いますので、これがポートフォリオでなくても、こんな試みをやっていますということで、出されるのでもいいと思います。

○平山委員

こういった取組は自分の振り返りには使えるので、絡んではくるのかなとは思いますが、本来の目的はポートフォリオ評価というところからスタートしてはいないので、少し考えてみたいと思います。

○真嶋座長

むしろ、日本語教育を依頼される企業の方の方が評価をされるといいますか、理解しやすいようなものを求めているらっしゃるということになるでしょうか。学習者本人ももちろん大事ですし教員も大事ですが、ステークホルダーがほかにもいらっしゃるわけですから、みんなが満足するような評価の方法ということを考える必要がある特殊な分野かもしれません。

○島田委員

本文の中では、厚労省が今年出した「就労場面で必要な日本語能力の目標設定ツール」も参照されていて、配慮するということですね。相手の日本語話者が気を付けることはその目標設定ツールのC a n d oを示すところにレベルごとに書いているので、そこを引用することが出来るかもしれません。

あと、最後に示した学習者のキャリアプランは、ポートフォリオではないとおっしゃっていましたが、私も技能実習生を受け入れている建設業の親方や職人さんにインタビューを行った際に、日々の日誌を日本語で書いてもらって、交換日記のような形でやり取りをしているというお話を結構聞くことがあります。そのようなステークホルダーが日本語の学習に関わったり、評価者として励ましたり、就労者は働いている職場の人間関係を作ることが目標で設定されていると思いますが、そのような学習活動に参加していくことはあるのかと思っています。ですので、今、使われているものもそういう役割を持ったものもあるのかもしれないと感じながらお話を伺っていました。

○平山委員

この研修は企業とつながる手前に、ハローワークなどの就労支援機関とつながりがあり、コースの中では就労現場に見学に行くということもあります。様々参考にして、もう少し深めていきたいと思います。

○真嶋座長

ありがとうございます。それでは就労の部分はよろしいでしょうか。これで2章が終わりました。最後に全体を通しての御意見がありましたらお願いします。

○オーリ委員

松岡委員がおっしゃったことがすごくよいと思いました。というのは、第1章でCDCの理念がうまく説明されているので、それが第2章の例えば各事例の最初の部分とまとめに、受入れ側としての日本人が何を心がければいいのか、何をすればいいのかということ丁寧な書くと、そういう意識を持って自分のカリキュラムやコースを作ることが可能になるのではないかと思います。

○真嶋座長

貴重なコメントありがとうございます。それでは、本日の委員の皆様御意見を受けまして、執筆者の皆様におかれましては、加筆修正等を引き続きよろしくお願いいたします。修正原稿の提出期日等につき

ましては事務局より改めて御連絡させていただく予定です。

続いて資料3-1「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて、資料3-2「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールCan do 候補案」の審議に移りたいと思います。こちらは「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールに関する検討になります。まず事務局より資料の説明をお願いいたします。

○松井日本語教育専門職

では、簡単に配布資料3-1と3-2について説明をいたします。こちらは、「日本語教育の参照枠」で収められているCan doを多言語化して、様々な言葉の人が自分の一番よく分かる言葉で自分の日本語の力を自分で把握できる仕組みを作るというものです。

昨年、「日本語教育の参照枠」のCan doの量的検証をしまして、その検証の委員を務めてくださったアドバイザーの先生にこのツールの仕組みについて相談いたしました。評価の仕組み等々は概ねこのとおりでよかろうということですが、特にレベルごとのCan doを固定するのか、毎回ランダムなものが出るようにするのか、どちらがいいのかということについて御相談したところ、個別のCan doには統計的な困難度の数値があるので、ランダムに質問項目を提示すると困難度の数値にばらつきが出るので、今回に限っては各レベルのCan doは固定した方がよかろうという御意見を頂きました。

そうすると毎回同じCan doが出てきてしまうわけですが、それによって毎回学習者など、このシステムを使う人が前と比べてどれくらい出来るようになったのかということも分かるので、今回は取りあえず固定の質問項目で自己評価を行ったらどうかということになっています。

個別のCan doには統計的な困難度の数値が付いています。この中央値と呼ばれる数値になるべく近い数値がついているCan doを選ぶ必要がありますとアドバイザーの先生から頂いておりまして、この数値もとに今回使うCan doを選んだものが資料3-2になっております。この青い色がついているものが代表項目と呼ばれていて、比較的数値が安定しているものです。赤いものが逆転項目となっておりまして、レベル感がずれているCan doです。A1、C2はCan doの数自体が少ないものから、今回の調査で逆転項目と出たものも、質問項目としては使わざるを得ない状況があります。

今回、自己評価に使うに当たって、現実にはそういう場面がありそうにない、指示が分かりにくい、自己評価が難しい、などというCan doも一部含まれているかもしれません。このような点について、お気付きの点があれば御指摘いただきたいと思います。説明は以上です。

○松岡委員

この自己評価ツールのCan doの文言はこのままですか。

○松井日本語教育専門職

項目困難度の統計的な数値が付いているため、Can do本文は、このままを想定しています。

○松岡委員

これを使う方のアカデミックバックグラウンドにも関わってくるような文言があるので、適切に反応できないのではないかとこの部分が散見されるような気がします。

○真嶋座長

これはCEFRの翻訳で、そのCEFRはヨーロッパの語学教師が自分の学習者の能力を記述したものであり、それを修正したものですので、確かに理解しにくい表現があります。言語教育の教師が見れば分かるものであっても、外国語を初めて勉強している人にとっては難しい表現があるかもしれません。ただ、表現を変えてしまうと、評価に影響するので、今回はとりあえずそのままということだと思います。

○佐藤委員

逆転項目の扱いに関して先ほど御説明いただいてよく分かりましたが、「Can doの量的検証に関す

る調査報告書」を拝見すると、実際に逆転項目でA1レベルだったのにA2となったり、逆にA2からA1となったりという逆転項目の中でもより中央値に近いものを選ぶということが可能なのか、実際に手元にあるものがこれだけなのか、そういったことをまず確認したいのですが。

○松井日本語教育専門職

例えばA1「書くこと」のC a n d oは全部で五つしかありません。今回のレベル判定はレベルごと五つのC a n d oを答えてもらってレベルを判定する仕組みですので、逆転項目を使わずに四つで判定するのか、あとは逆転項目を使って五つで判定するのかという選択になります。

この逆転項目はあくまでも今回の調査の統計値における逆転項目です。今回の調査は、ある一定の条件下で行われており、適切な量と質の母集団の下で定められた逆転項目ではありません。従いまして、逆転項目が入っていても5項目で判定をしてはどうかという御助言を頂いているところです。

あと、C a n d o自体の大幅な書換えは難しいので、不適切なものがあれば、ほかのC a n d oとの差し替えは検討できますので、御指摘頂けるとありがたいです。

○佐藤委員

評価の例で、今回の資料ですと10ポイント以上取れた段階で次のレベルとなっておりますが、前は8ポイント以上でした。2ポイント追加したということでしょうか。

○松井日本語教育専門職

アドバイザーの先生から得点率は7割をめどにした方がよかろうという御指摘があり、2ポイント上げました。

○佐藤委員

ありがとうございます。自身の日本語能力を簡易に判定するという事なので、しっかりとした条件を付けていただけるとよいのではと思います。

○真嶋座長

ありがとうございます。ほかの先生方、委員の皆さんも御意見、お気付きの点がありましたら、又メール等で事務局にお知らせいただければと思います。引き続き、このツールにつきましては事務局で作業を進めていただければと思います。それでは、これで本日の議事は終了となります。今後の予定につきまして、事務局からお願いいたします。

○松井日本語教育専門職

次回のワーキンググループ会議は1月28日、金曜日、午後3時から5時を予定しております。よろしく申し上げます。なお、修正原稿の締切り等につきましては追ってeメールにて御連絡を差し上げます。よろしく申し上げます。

○真嶋座長

これで、第4回「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループを閉会いたします。御協力どうもありがとうございました。

— 了 —